
黒衣のIS

黒 白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒衣のIS

【Nコード】

N2333S

【作者名】

黒白

【あらすじ】

舞台は「IS」。本来ISは、女性にしか動かす事のできないマルチフォーム・スーツそれを男性である織斑 一夏が動かしてしまう。そんな世界に別の作品「BLEACH」の黒崎 一護を無理矢理ねじ込んだらという作品です。

本作品は、基本原作通りにいきたいと思いますが、脇道にそれたり、ご都合主義であったり、さらには筆者の独自設定・解釈が多々含まれます。

また酷評・誹謗中傷などはご遠慮ください。

最後に更新が遅く、不定期ではありますが、そんな稚拙な文でも楽しんで頂ければ幸いです。

プロローグ（前書き）

こんにちは

初投稿で、自己満足的な部分が多いのですがよろしくお願ひします。

注意：原作と異なります。

プロローグ

藍染との戦いの中

一方は他を塗り潰さんとするばかりに唯黒くあり、他方は、白く異形の形をとり相対する黒に見入っていた。

黒を纏った方が口を開いた。

「最後の月牙天衝って言うのはおれ自身が月牙になることだ。」

そう言っただけ振り下ろされる右腕、
使用すれば圧倒的な強さをもってして敵を粉碎するだろうその一撃には当然対価がある。

死神としての全能力の喪失と全霊力の喪失である。

故に、彼はその一撃に全ての願いを込める。

今まで彼によって傷つけられた仲間を思いながら・・・
今まで苦楽を共に戦い抜いてきた相棒^{新月}を惜しみながら・・・

黒い奔流が藍染を飲み込む。

全てを否定し、無に返すようなそんな黒い一撃は瞬く間に伸びて行き、

その波が通り過ぎた後には一筋の巨大な爪痕のみを残して何も残ってはいなかった。

結果からすれば、黒崎 一護という男は叛逆の徒、藍染 惣右介という男に勝利を収めたのであった。

そしてその戦いの勝者は、力を全て使い果たし、底の見えない地中深くへと落ちていった。

その後、彼の無事を唯祈って大勢の人物がその場に駆けつけたが、誰もその姿を目にすることは無かった。

戦いを終えて地の果てに飲み込まれていった一護は気がつくも前後左右のまったく付かない空間に一人ぼつんと立っていた否、浮いていた。

「何処だここは、確か藍染を倒して・・・自分で作った穴に落ちてったのか!？」

折角、苦勞の末に倒しても自分が助からないと心配している人たちに申し訳ないと思いつながら・・・自分を心配してくれた人々に心の中で謝りながら・・・

これまでのことに漸く踏ん切りをつけると、

いきなり目の前に老人が現れた。

「うわ」

いきなり現れたので一護は相棒「《斬月》」である斬月を手を構えてしまった。

そうあの藍染を一撃のもとに平伏させた一護の目であつてもいきなりである。

いくら始解状態のとは言え、力が失いつつあるとは言え目の前の老人には目を見張るものがあった。

「お前、何もんだ。そんでもって此処は一体何処だ。」

声に怒気をはらませながら問いを投げかけた。

老人は笑いながら

「ようこそ神の国へ。そして私は神である。」
とか抜かしやがった。

「は？」

一護がそう思うのも当たり前である。彼は死後の世界―《尸魂界》と接してはきたが人間である、今となつては死者であるといつても間違いではないだろうが、かといって神様と呼ばれるような奴に会うことは無い。

そして何よりも彼は死者の魂はほとんど例外無く尸魂界に導かれることを知っていたからでもある。

一護がそんなことを考えていると自称、神様はこう続けた。

「お前はもとの世界では、もはや存在せん。わし自らが痕跡を全て消してきたからな。」

その言葉に一護は絶句した。

いくら彼が死んでしまったとしても彼の記憶、意思、思いは全て彼の仲間に託してこれられたと思っていた。

もしかしたら仲間は納得しないかもしれないが彼自身は納得もしていたし、諦めてもいた。

だがしかし目の前に立った奴はこういったのだ「存在を消した」とつまりいなかったことにされたのだ、それは彼の思いも仲間の思いも踏みにじるものだった。

怒りに一瞬我を忘れたが何とか持ち直して見せた。

「・・・」

さらに神はこう続けた。

「お前はこの神の国さえも藍染の手より守って見せた。本来ならばお前にはわしら全ての神からの祝福を持って余生を過ごしてもらおう程のものだったのだ。

しかし藍染を倒したあの時、あの場所ではわしらの力をもってしてもお前を助け出すことはできなかった。唯一できたことが穴に落ちていくお前をこの場所へ避難させることだけだった。だからお前はまだ死んではおらん。

だがこの国に来るということは、今までのお前という存在の全てが消えてしまうと云う欠点があったのだ。そこでお前にはもう一度、他の世界で人生をやり直してもらおうことにした。お前の功績に対してこの報いは誠に遺憾の残る処置だが他にわしらにできることは他には何も無い。本当にすまない。そしてありがとう。」

と神は此処まで一気にしゃべった。本当に真摯を込めて丁寧にそして申し訳なさそうに

黙って聞いていた一護がやっと口を開いた。

「教えてくれ、皆は、仲間は元気か？」

この問いに対して神は唯一言

「もちろん」

と、

この答えを聞いた一護は、

「そうか」

とだけ答えた。

また会話の無い時間が過ぎた。

次に口をあけたのは一護だった。

「俺の力、斬月はどうなるんだ。」

「その力もいずれ消える。その力が完全に消えたときお前は、次の世界へ飛ばすことになる。その時間も間もなくだろう。」

「そうか。なんか寂しいな・・・次の世界ってのはもとの世界じゃないわけだしその世界でまた皆に会える訳でもない。」

自分でも分かる。否、自分だからこそよくわかる。段々、死神とし

ての力が抜けていくのが・・・

「そろそろお別れか今までありがとな斬月」

そんな言葉と共に一護は神の国から姿を消した。

「新たな世界に多くの幸があらんことを・・・」

T o b e c o n t i n u e d

プロローグ（後書き）

結局、今回ではISの世界まで行きませんでしたね。

誤字、文法的なミスがあればこれからも訂正をします（教えて頂けるとありがたいです）。

こんな調子で次回も（日付けは決めていませんが、毎回5時頃に更新していきたいと思います）。

最後に更新が遅く、不定期で稚拙な文ですが、読んでくださった皆さん、感想が頂けるとうれしい限りです。また酷評・誹謗中傷はご遠慮ください。

お付き合いありがとうございました。

IS学園に入学するまで（前書き）

本来なら今日の朝5時に更新するはずだったものです・・・

いきなりですが実は私、今年大学受験を控えている高校生だったりしちゃいます。

春休みが終わり、始業式の日には投稿させて頂き学校から帰ってみれば皆様からの温かい激励ともうれしかったです。

学校に通っている、受験を控えているなどの理由から更新が遅れるなどということが起きる訳なのですが、皆様からの感想を頂いてそれを更新時に見る事は出来ても一人一人に返していく時間がありません。

なので感想を下さりましたreina様 ミスター様 株式様

このような場で大変申し訳がないのですが、激励の言葉ありがとうございます。ございました。

またこれからも皆さんから頂いたコメントはこの場でお礼をさせて頂いたく事となりますがご了承のほどよろしくお願いいたします。

長々と書き連ねてしまい申し訳ありませんでした。

それではお楽しみ頂けたらと思います。

IS学園に入学するまで

名前：黒崎 一護

年齢：16歳

髪の色：オレンジ

瞳の色：ブラウン

職業：高校生

特技：ユウレイが見える

だったのだが・・・

気がつくと優しそうな母の傍らで眠る赤ん坊になっていた。

「オギヤー（何でだー）」

あまりの叫び声？で部屋中に響いたことは余談である。

取り敢えず

11年が経った。

俺は黒崎 一護

職業は小学生。名前も容姿も以前と変わらない。家族構成は多少違って父、母、俺の3人だ。

開業医を父はしていて、母はそのアシスタント兼看護師をやっている。

唯一、以前と変わったことは全く霊や虚、死神を見ることはもちろんそれどころか霊力も全く感じられなくなったことだった。

俺はそれを寂しくも思うし、今では引きずっていても仕方ないので割り切って新たな人生を謳歌しようと思っている。

それでも、もしもの為と最近は、近くの道場に通って体を鍛えている。

最初、前も幼い頃には、空手をしていたのでどうしようか迷ったが、結局、剣道にした。

もう何度も斬魄刀に触れていたのになじむと思ったからだ。

ところが動きを思い出しながら竹刀を振っているとやはり今まで自分の扱っていた得物と違うこともあるが全く形がなっていないと師範に怒られる始末。

学校でも道場でも髪が目立つためか、友達はできず孤立してしつぽあった。

けれどもそんな状態でも近頃大きな変化があった。

と言うもの最近、近くに住んで居て、同じ道場にも通っている少年のおかげである　　名前を織村　一夏と言う。

一夏と友達になってからは、今までの周りの対応が嘘のように変わっていった。

勉強の方は高校でも上位にいた方だ。正直言ってできない方がおかしい。

スポーツも小さいころからずっと剣道を続け、自身を磨き続けた彼には容易いものであった。

いつしか一護と一夏は『一』の字コンビ』として学校内でも有名になり持ち前の友好さと面倒見の良さで皆のリーダー的な存在になりつつあった。

道場とも長い付き合いの所為か師範の娘さん　　篠ノ之　　箒

ともすっかり仲良くなって今では一夏も交えて一緒に稽古をしている。

しかしそんな日々も長くは続かなかった。

そう箒の姉　　篠ノ之　　束　　がインフイニット・ストラトスIを開発・発表したためである。

ISは公に発表されてから白騎士事件と言う世界を巻き込んだ大事件によって、なし崩れ的に世界に認められることになった。

そのため篠ノ之一家は引越しを余儀なくされ、その後も各地を転々と移り過ごす日々になった。

しかしここで問題が発生した。
ISには女性しか搭乗することができなかったのである。

そうしてこの事実から瞬く間に女尊男卑へと繋がっていったのであった。

かくして世界は大きく変化していった。

世界を震撼させるほどの濃い内容の出来事の後すぐ中国から来た凰鈴音と一夏に次ぐ親友になり中学2年まで多くの時間を共に過ごし、その後家庭の都合で中国に帰国したが、再開を約束した。

また一夏の姉である織村 千冬がISの搭乗者としてISの世界大会で見事総合優勝を果たし、『ブリュンヒルデ』の称号を得るなどとてもめまぐるしい日々であった。

時は流れて

数分後には始まる高校受験を本当に間近に控えた受験生の二人がある建物の中で立ち往生していた。

簡単に言えば迷子である。

二人とも背が高く一人は、オレンジ色の髪をもち、少し柄の悪そうदैいて不機嫌そうな目はしっかりと前を見据えている青年　　一護、もう一人は髪が黒くとても人当たりのよさそうな青年　　一夏である。

二人は傍から見てもとても仲がよさそうで、確かに二人の間には確固とした絆があった。

一護が提案する。

「一旦外に出て誰かに聞いたほうが早くないか？」

それに一夏が答える。

「でもこの受験票に書いてある建物はここだろ、扉を片っ端からあけていけば何とかなるだろ。」

と軽く返した。

結局、片っ端からあけることになったが……。

二人はどんどん奥まった方へ移動して行き遂に突き当たりのドアの前まで来てしまった。

関係者以外立ち入り禁止とだけ書かれている。

「しょうがないスタッフの人に聞いてみようぜ」

どちらがとも無く恐る恐る開けて入ってみると・・・

そこには巷を騒がしている待機状態のISがテーブルの上に鎮座していた。

きつと興味本位だったのだろう一夏がISに近づいて行き触れた。すると、起動してしまっただのである。

数秒が経った後にはISを展開した一夏がいた。

それから、騒ぎを聞きつけたスタッフが、一夏を見て驚き一護が声をかける間も無く一夏は連れて行かれてしまった。

結局一夏はIS学園の入試を受け合格、(強制的に)入学する事になったが大親友、一護はその場に取り残され暫く探しても誰も居ない。

そして今は気づけば80分あった監越学園の試験時間も試験開始から40分・・・もうとつくに一科目が半分以上終わっている、そのことに気づくと一夏に悪いと思いつつも慌てて外に出て通行人に会場を聞けば今居た建物の直ぐ隣と言う不始末。

急いで会場に入り高校受験を大遅刻と言う始まりでスタートが、もうあまり時間は残っていないので大急ぎで一科目目に取り掛かる。

結果は不合格、五科目で受験し820/1000点これは合格者平均を約20点ほど超えている好成绩だ。内訳は4科目（数学、英語、社会系、理科系）は195/200点これだけで既に780/800点と受験した中でもトップ、がしかし彼がもつとも得意な国語はこれには入っていない。

なぜなら一科目目の国語の試験時間は25分これでは得意だろうが不得意だろうが関係ない現代文が2題、古典が2題ではとてもとてもすべて目を通す事ができるはずがないさらに急ぎに急いで記入ミス結果40/200点それがこの試験結果だった。

これだけなら合格をもらえるはずなのだが入試要綱を見ればこうある。

一つ・点数が合格点に達していても極端に悪い科目が合った場合のみこれを不合格とする。

こんな要綱が適用される日が来るとは一護は全く思ってもみなかったのだろう普通に不合格になるよりも堪える結果に終わり一校しか受験しなかったのでまさかの高校受験での浪人生となった。

数時間後、一夏は世界で唯一でISを操縦できる男性として大々的に公表された。

一夏がISに搭乗できることが世界に知られると周辺の人物について徹底的に調べられた。

姉である千冬はもちろん、ISの製作者、東博士とその妹、篝そして一夏と特に仲のよかった一護も例外ではなかった。

一護はその後日IS学園に呼び出された。一夏の知人（一部を除く）と共に簡易なテストを受けることとなった。

男子の中では、一護のみが起動に成功し、且つ操縦者の中でも非常に高い適正（A+）を記録した。

To be continued

.

IS学園に入学するまで（後書き）

最後までお付き合いありがとうございました。

私がどうも上手く描写を書けない所為なのか文が長くなり、進みも遅く大変読みにくくなっているのですが今の私にはこれが限界ですので勘弁してください。

誤字・脱字、文法的なミス、指摘、感想などがありましたらよろしく願います。

読んでいただきありがとうございます。

そしてここからは唯の愚痴なので飛ばして下さって結構です。

ISの新刊が出ましたね。

今までISは一卷からずっと発売日当日に買ってきていましたが、地震の所為か、アニメ化の効果からは分かりませんが初めて発売日当日に手に入れることが出来ずまだ読む事ができていません。非常に残念です。

それでいいのか受験生とお思いになるかもしれませんが毎日のノルマはこなしているので大丈夫だと思いたいです。

そしてなぜか長くなってしまった一護の試験結果なのですが、あのネタは私が実際に犯してしまった過ちで（あんなに良い成績ではありませんが）模擬試験で降りる駅を2つ間違え大遅刻し、且つ解答欄の記入ミス挙句の果てに最初の1科目があんな感じの点数、採点して返される時、先生にそんなこと本番でしたら確実に落ちるよ。とまで言われたほぼ実話を元にしたエピソードです。

どうでもいいとやと思ってこのページを閉じていく皆さんここまで

読んでいただきありがとうございます。

どんなに時間が掛かろうと完結させますので今後ともよろしく願
いします。

ではまた

入学、IS学園 どうしてこうなった(前書き)

また時間が・・・

小説を始める前に感想を下さったナイトキャップ様 reina様
他にもお気に入り登録をしてくださった皆様 評価をくださった方
ありがとうございました。

入学、IS学園 どうしてこうなった

ところ変わってIS学園

IS学園1年1組

「こんにちは皆さんこの度は、IS学園へのご入学おめでとございます。」

教壇に立つ小柄な教師(?) 山田麻耶 の挨拶と共にHRが始まった。

結局、一護も一夏も「保護」と言う名目上の強制によつて彼らの意思は尊重されるはずも無く、半ば無理矢理にIS学園に在籍せざるを得なかった。

一護の場合などは、家にいきなり一夏の姉 織斑 千冬が押しかけ彼の両親を説得、その場で入学の手続きまでしてしまった。
・恐るべき仕事力である。

そんな事はさて置き、ここIS学園は世界で唯一のIS操縦者育成機関である。

そのため生徒は男子である彼ら二人を除けば他は皆女子で講師もほとんどが女性である。

中には男性の講師又は関係者がいるのかもしれないがこの広い敷地内ではめったにお目にかからないだろう。

傍から見れば、ハーレム状態だが、「過ぎたるは及ばざるが如し」とはよく言ったもので何事にもやはり限度と言うものがある。

早い話、青年二人がこの中で過ごすには少々（かなり）気が滅入る環境であつた。

さて今はHRで自己紹介をしている。

「織斑君、織斑君・・・」

幼馴染とも大親友とも呼べる一夏がもう何度か山田先生に呼ばれているが、当の本人は考え事をしているのか全く気づく様子が無かつた。

名前呼ばれること数回、やっと気づいたときには山田先生はもう涙目であつた。

一夏は慌てて立ち上がった。

「織斑 一夏です。よろしくお願いします。」
と、

しかしそれだけでは周りの生徒（女子だけだが）がよしとする訳が無かつた。

皆無言でこう言っている。「他には？」
意を決したのか一夏がまた口を開く。

「以上です。」

すると周りの反応よりも速く何か黒い物体が風を切り、頭に直撃。
バシンと景気のいい音がクラスに響き渡ると同時に一夏の脳細胞が5000程死んだ。

叩いたのは一夏の姉、千冬である。

一護は、家にも押しかけられている(?)ので彼女がIS学園で講師または関係者である事は知っていた。ところが、一夏は違ったようである。

「げえ、千冬姉なんでここにいるんだ？」

「挨拶くらいまともにできんのかお前は！それとここでは織斑先生と呼べ。」

そんなやり取りから周りの生徒たちが織村姉弟であることを知りまた賑わいだが、織斑先生の一喝で静まる。

なんかこう・・・全く何処までも規格外な人である。

そんなやり取りの中このクラスは担任が織斑先生、副担任が山田先生であることが分かった。

やがて自己紹介も進んでいき、遂に一護の番まで回ってきた。

「黒崎一護と言います。こんな髪をしていますけれどつきとした日本人です。趣味は特にありませんが昔、剣道をやっていました。それとそこに居る一夏とは小学校からの付き合いです。分からないことも多々あると思いますがどうかよろしくお願いします。」

と多少回り(主に千冬)に気後れした所為か微妙な自己紹介だがなんとか無難に切り抜けた。

そして座る直後にふと前を見ると見知った顔がいた
篠ノ之 篤である。

彼女とはそれこそ一夏とまではいかないがとても仲が良く親しかっ

たのを彼は覚えていた。

暫くそんなことを考えているうちにクラス全員の自己紹介も終わり、休み時間に突入していた。

周りの女子は牽制し合って居る所為か誰も彼らのところには来なかった。

それをいいことに一護は、一夏の元へ向かいとりとめも無い話をしていた。

何せISを起動させてからは忙しく、今になるまで話すことは愚か連絡さえもまともに取ることができなかったのである。

そんな二人に筈が話しかけてきた。

「ちょっといいか。二人とも」

二人はこの場で話しても特に構わなかったが筈は、周りがどうも気になるらしいので屋上で話すことにした。

「そういえば、剣道の全国大会優勝したんだってなおめでとつ。」

一夏がそういつて口火を切った。

「なんでそんなこと知ってるんだ。」

一護はそんなやり取りを見ていると六年前と変わらないと言つ事に気づいた。

簡単に言えば一護は筈が一夏に対して恋愛感情をもって接していることを知っている。さらに言えば一夏がそういう事にと

ても鈍いという事も・・・実際、このような光景も何度も目にしている・・・

一通りの会話が済んだのか丁度良く次の予鈴が鳴り出した。

「取り敢えず、一夏共々またよろしくな」

と久しぶりの一夏との会話で真っ赤になっている筈に声をかけると一足先に教室に帰っていった。

「であるからして

なので

先程から山田先生が前でISについての授業をしているが電話帳と間違えて教本を捨ててしまった何処一夏かの馬鹿には当然何を言っているのかさっぱり理解できていない。

そのことを正直に告げると山田先生は

「今までのところで織斑君以外で分からない人はいますか？」
と拳手を促したが、周りはもちろん一護もまた入学が決まった際に
必読とあった教本を読まないわけが無かった。

一夏は遅れた分を人一倍、毎日勉強して取り戻す
羽目になったのであった。

二時間が終わり昼休みに入るとまた一護が一夏の席にやってきて談
笑をしていた。
すると今度は

「ちょっと、よろしくて」
と声をかけられた。

彼女　　金髪の縦ロールで白人特有の青い目がこちらを見て
いる。何のことが分からず呆然としていると

「私に話しかけられたことでも光栄ですのになんですかその態度は」
といかにも今の女性の対応をしてきた。

しかし、一護は自分の紹介が済んだあと「ぼけー」としていたので
覚えはないし、一夏に関してもそれは同様だった。

「悪い、誰なのかわからねえ」
と一護が言えば

それがお気に召さなかったらしい

「イギリス代表候補生にして入学主席であるわたくしセシリア・オルコットを知らないですって」
少々語尾を荒げて言った。

「ちよつといいか？代表候補生ってなんだ？」

この一夏の一言でクラス全員がこけた。
向かいにいる一護も顔をしかめて若干笑っているように見え、セシリアに関しては信じられないものを見たと言った具合である。

「一夏お前、言葉から連想すれば分かるだろ。」
とあきれながら一護が助け舟を出せば

「そうかじゃあすごいんだな。」

その一言で復活した代表候補生は

「そう私はエリートなのですわ。大体同じクラスになれただけでも幸運な事ですよ。」
と宣いやがった。

「「そうかそれはラッキーだ」「
と見事にハモった。

「馬鹿にしていますの？でもまあ私は優秀ですからあなた方のよう
な人でも泣いて頼まれれば教えて差し上げてよくつてよ。なにせ
入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。」

「入試ってES動かして戦うやつの事か？だったら俺も勝ったぞ。」

「は？わたくしだけと聞きましたが……。」
一護も一夏が教官を倒したことに驚いているがセシリアはその比ではなかつたらしい。

「女子のなかではってオチじゃないのか？そういえば一護はどうだったんだ入試」

そんな問いに一護は

「負けた……」

とだけ返した。

それもその筈、訓練機同士の戦いで、適正がいくら高くともほぼ初めの一護、片や世界一強いと評されている千冬その人だったのから。

そんなこんなしているうちに次の予鈴が鳴ったためにセシリアは

「また後で来ますわ、逃げないことね」

とありがたくないお言葉を残して席に戻っていった。

今は1、2時間目とは違い山田先生ではなく織斑先生が教壇に立っている。

どうやら3時間目は、織斑先生の授業のようだ。

「これからISの装備に関する説明をする。」

と言いかけて何かを思い出したようだ。

「ああそうだ、その前にクラス代表と副代表を決めないとな」

するとすぐに

「織斑君を推薦します。」

それに呼応して

「私も」

一護は一夏も大変だなと思いつつ苦笑いを浮かべていた。

「私は黒崎君を推薦します。」

そんな一言で一護は目を丸くした。

「他に誰かいないのか他薦でも自薦でもいいぞ、候補がいなければ二人のうちどちらかが代表でもう一人は副代表だぞ。」

「そのような選出は認めませんわ。物珍しいだけでこんな極東の猿にされては困ります。クラス代表には実力ナンバー1の私がるのが必然ではなくって。第一、私はこんな文化の後進国に暮らすこと

自体・・・」

「イギリスだってたいしたお国自慢無いだろ」

ついつい言う感じに今までまくし立てていたセシリアを一夏が遮ってしまった。

「確かにな、しかも何年間まずい料理の覇者だよ。」

これまたつい一護も口うちを挟んでしまった。

「貴方たち私の祖国を侮辱しますの！！決闘ですわ」

そう高らかに宣言した。

「よしや乗ってやる。四の五の言うより分かりやすい。」

と一夏はそんな物騒な申し出を受けてしまった。

そこには決闘で決めるといふ明確な方法に納得している二人と面倒な事に発展してしまった事に額を押さえる一護の図が出来上がった。

「よし一週間後の月曜日の放課後に第三アリーナで総当たりの模擬戦をもらう。」

追い討ちをかけるように千冬が決定事項として全体として大々的に通達してしまった。

気乗りしない一護は頭を抱えるしかなかった。

放課後、二人は教室で今日の授業の復習をしている。

そんなところにいきなりドタバタという足音が聞こえてくる。

「織斑君たちここに居ましたか、丁度良かった。君たちの寮の部屋割りが決まりました。」

と山田先生は言う。

「え、俺たちは1週間後だって聞いていたんですが？」

一護それに答えた。

「その辺り政府から何も聞いていないんですか？事情が事情なので急遽、部屋割りに組み込みました。で、その部屋割りですが、片方は相部屋でもう一人は物置で寝泊りしてもらうことになります。どちらが・・・」

と言いかけたとき

「俺が物置で！」

本日二度目、見事にハモった。

「俺もこればっかは譲るわけにはいかねえ！」

「俺もだ！やるか」

二人して腕まくりをし、拳句の果てに準備運動までし始める始末。そんな様子を見て喧嘩かと思ったのか慌てふためく山田先生

「「じゃんけんほい」」

「よっしゃー！勝利！！」
続くこと3回、漸く一護が出したチヨキが一夏のパーに勝った。
そこにはチヨキを掲げて勝利を喜ぶ一護とorzと頂垂れる一夏が
その場に残った。

「じゃあ行くか」

部屋割りで勝った事により上機嫌な一護とその反対の一夏は5分と
掛からない寮へと向かっていった。

「あつたあつた。1025室俺はここだ。」

「そうか俺はこの通路の奥らしい。またあとでな」
早速、部屋に入る一夏。

暫く通路を歩いていると後方で女子が群れを為しているその中心に
は先程部屋に入ったはずの一夏が扉の前で土下座をしている。

「・・・何してんだあいつ」

全く状況が読めなくとも女子が絡んでいる時点で一夏に原因がある
とか思ってしまう自分は本当に一夏の友達なんだろうかと思いが

ら歩を進めた。

何度も見てきた一護だからこそ分かりたくないが分かってしまう光景だった。

部屋に着いて荷解きを始めて早30分それほど多くない私物を整理し終えた。

山田先生は、物置と言っていたが人が入る事になって多少改装したのだろう今では机とベットとクローゼットが1組置いてありシャワー室も完備と下手なホテルよりも豪華な造りへと変わっていた。

やっと一段落した所で一夏の相部屋の人にも一声かけておこうと彼の部屋へ向かった。

トントン

「おい、一夏いるか？俺だ俺」

暫くして開いたドアから箒が出てきた。

「一応、一夏のルームメイトに挨拶と思ってきたんだけど箒だったのか。一夏どうしてる。」

「い、一夏ならさつき昏倒させ・・・いやもう寝たぞ。」

なぜか物騒な言葉が出てきた気がしたが・・・

「そ、そうか・・・ホント一夏の奴は・・・全く何してんだか、でもあいつは鈍感でかなり罪作りな奴だけどいい奴だからよろしく頼むな。じゃあお休み。」

と言っでもと来た道を戻ろうと方向転換をする。すると何を思い出

したかもう一度振り返って

「そうだ筈、せかつく同じ部屋になったんだ一夏の奴は押し倒すくらいはやらないと気が付かないぞ。じゃあほんとお休み。」
真っ赤になっている筈を残してその場を立ち去った。

一夜明けて

本来、一護の朝は早いだが昨日はなれない環境化にはじめて置かれたせいか既に時刻は7時を回っていた。

寝坊した事から気を取り直して食堂に向かつと食堂の前で一夏と筈がもめていた。

暫く歩くと一夏が居た。

「おう、おはよう」

「おはよう」

一夏に習って挨拶をする二人。

そして一夏となぜか朝から機嫌の悪い篤（また一夏のせいか・・・）等と思いながらの一護と言つ組み合わせの三人で食堂に入り、一護は日替わり朝食Aセットを頼んだ。

途中クラスの女子も交えて朝食をとっていたが、織斑先生の介入によつて幕を閉じた。

放課後

（やべえ全然わかんねえ）

また一日の授業が終わり一人、打ちひしがれていた。

教室を出て行くこうとする織斑先生が振り返って爆弾を落とした。

「そうだ伝える事が一つあったな織斑、黒崎。今、学園には予備機がないそこで政府から専用機が与えられる。その到着は模擬戦ぎりぎりになるらしい。」

周りからは黄色い声で

「『『『いいなあ、この時期に専用機、私も欲しいなあ』』』」

一護はそれだけで納得したようだ。

しかし一夏はそうはいかなかたらしい。
頭に？をたくさん浮かべている。

「わかってないようだな。よし教科書6ページを音読してみろ。」

「現在、（以下省略）」

簡単に要約すると、ISの中核たるコアは、製作者である篤の姉

篠ノ之 束のみが製作可能であり、全部で467機。そのコア全てはアラスカ条約によって定められ、各国・各企業に振り分けられ、研究・開発が行われている。

「簡単に言えば。実験体ってことか。」

どちらがともなく呟く。

その後、セシリアの挑発と篤の姉が束である事を知ったクラスメイ
トと篤は一悶着とがあつたが、それもその場から離れる事で自然消

滅。

そのまま二人は一旦部屋に帰った。

暫くは来ないという事は、専用機持ちのセシリアと訓練機でやりあう事はなくなつたが、如何せん来るのが遅いと言うのは、ぶっつけ本番と言う可能性がとても高い。

結局、一夏は筈に教わる事にしたらしくまず剣道を見てもらうべく剣道場に行つたらしい。

取り敢えず一護はその稽古を見に行くべく、剣道場に歩を進めた。

道場

怒声が聞こえる。

「どついうことだ！中学のときは何部に所属していた！」

「帰宅部で3年皆勤だ。」

「ISどころではない！これから放課後毎日稽古だ！」

（怒髪天まさに今の筈のことを言うんだろつな・・・でも昔は、一夏の方が強かつたし、何よりもあいつの目は強く前を向いていた。）
今出て行ったら確実に巻き込まれると思つた一護はその場を後にした。

•
•
•
•
•

入学、IS学園 どうしてこうなった（後書き）

今回も最後までお付き合いいただきありがとうございます。
誤字・脱字、文法的なミス、指摘、感想などがありましたらよろしく
お願いします。

reina様の感想の中で恋愛は？という質問がありました。個人としてはやりたいと思っています。
まだ誰と誰をくつつけるかは決めていません。
取り敢えず一夏と筈の組み合わせは変えないと思います。

読んでいただきありがとうございました。

ではまた

第三アリーナ・Aピットにて（前書き）

来週更新するつもりでしたが来週はちょっと忙しくて無理そうなので取り敢えず出来た分だけでもと思い更新させていただきました。

毎度毎度このようなところで大変申し訳ないのですがreina様 つむり様 感想・指摘・アイディア等とても参考、又は励みになりました。ありがとうございます。

また評価、お気に入り登録してくださいました皆様にも感謝したい次第であります。

それではお楽しみいただけたらと思います。

P・S・誤字につきましたは新しく書き換えました。

第三アリーナ・Aピットにて

遂にセシリアとの模擬戦日

「そう言えばこの一週間、一護は何やってたんだ？」

「俺は体力つけるために走りこんで、竹刀振りまわしてただけだな。一夏はどうだったんだ。」

一夏は箒をジト目で見ながら

「何処いったんだろうなISの訓練、なあ箒？」

「・・・」

「目をそらすな」

そう、箒は結局ISの知識・基本動作の一つも教えることなく一週間唯ひたすらに竹刀を持たせ永遠に振らせ続けたのだった。

おかげで昔の感覚が戻りかけているのも事実だが・・・

まあ良くは無いが2歩、3歩譲つてよしとしよう。

しかし急いで用意しているとされていた二人の専用機がまだ来ていない事が問題だった。

もう約束の時間までそう時間も残っていない。

焦つてもしょうがないので、こうして三人で談笑しながら待っているのだが、箒から聞いた話ではISは初期化フォーマットをして最適化処理フィッティングをする事で初めて搭乗者の専用機となる。

これを一次移行と言うらしい。

今は余談だがISは独自の意識を持ち自己進化していく事で更なる形態移行するらしい。
二次移行

山田先生が息を切らしながらバタバタと足音をたてて走ってきた。

「来ましたよ！二人の専用IS。さあ早く初期化と最適化を済ませてください。」

「時間が無いさつさと乗れ！馬鹿共！！」
いきなり横から織斑先生の怒声がピット中に響いた。

そこには白いISと見た目が『打鉄』と同じようなISの2機が後は搭乗者に乗せるのみと待っていた。

「織斑君は『白式』です。黒崎君はその機体です。……ってあれ黒崎君の機体には名前がないそうです。」

「……は？」「……」

一緒に届いたのだろうかB4版サイズの紙を片手にそれぞれのISを指差す山田先生の最後の一言でその場に居た全員が間の抜けた声を上げた。

「よし。もう時間が無い。織斑、お前から先に行け。」
織斑先生からの絶対遵守の命令が飛んできた。

「わ、分かった。」

一夏は白式に背を預ける様にして、ISを身に纏った。

「じゃあ行ってくる。」

「ああ・・・勝つていい。」

結論から言えば一夏は負けた。

前半は初期設定のままセシリアの駆る『ブルー・ティアーズ』のブルー・ティアーズ（以降ビット）を2機破壊し、一次移行後もセシリアを後一步のところまで追い詰めたが、最後は本当に拍子抜けな最後で一夏が『白式』の単一仕様能力『ワンオフ・アビリティ零落白夜』が持つ特性（自分のシールドエネルギーを攻撃に換えて相手のシールドバリアを引き裂き、絶対防御を発動させることで一気に相手のシールドエネルギーを消費させる能力つまり、バリア無効化能力）を上手く理解・運用できていなかったための敗北だった。

現に一夏は試合が終わった今でもどうして負けたのかが分からない
と言う顔をしている。

そうして一旦戻ってきた一夏は

「散々持ち上げておいて、この様か大馬鹿者」
と織斑先生のありがたいお言葉を頂戴した。

一夏が試合をしている間

一護は自分の未だ『名前すらないIS』に背を預ける様にISを身
に纏った。

一護が今までに使用してきた訓練機が展開し終わったのであれば、
頭部・肩・腕・背中・胸部等にそれぞれの装甲・装備があり、尚且
つハイパーセンサー（視覚補助等のためのシステム）やPIC（I
Sが浮遊・加速・減速等をするためのシステム）が起動していた。

しかし今回それらは全く無かった。
装甲・装備もなければ起動時のややこしいメッセージもない。

強いてあげるならば、死覇装と言う非常に特殊な服を着ているという点を除いて……

「な、何で死覇葬なんか着てるんだ。」

誰もが一夏の試合に気を取られていて一護の眩きもISを装着した事も気づいてはいない。

そう背負っているのはまだ始解も済んでいない斬魄刀 斬月

「何で斬月が……それに力は全部失ったんじゃないのか？」
今は考えるだけ無駄なのだが考えずにはいられなかった。

試しに柄をその手に持ち軽く何度か振ってみる……やはり間違いない。

目頭が熱くなってくる。

確かに今、能力は物凄く落ちているし、斬月との対話も出来ない。だがこの感覚は間違えようがなかった。

・・・相棒が戻ってきたというのは心強くまた、とても頼もしい。

皆の方を見てみると随分と時間が経ってしまったらしい。

丁度一夏が一次移行をしたところらしく試合はまさに佳境に入ったところなのか全くこちらに気づいていない。

まだ暫く時間がかかると思ってしまうとまた感慨に耽ってしまった。

どうやら試合が終わったようだ。

結局一護は、少しも試合を見ていなかった。

ともかく『ブルー・ティアーズ』のビットは一夏との戦闘でいくつかが大破してしまった、それに対して一夏はシールドエネルギーを補充すれば良いだけなので先に一夏と戦う事になった。

やっと一護に注目が集まった。

そして織斑先生から振り返りざまに一言

「何だその格好は？」

どう答えていいのか分からずに焦りだす一護は

「一応起動させたんだけど、何が起こってんのかさっぱりわかんねえ、あついや分かりません。」

そんな相手を考えない一護の言葉に一瞬、織斑先生が腕に力を込めたことを察知してからか咄嗟に言い直し事を収めた。

3人がどこをどう見ても一護のISには装甲と呼べるものが無く、細部が多少異なっている唯の袴を着て、背中に唯一武器と呼べそうな無骨な刀を一本背負っているだけのようにしか見えなかった。そしてその目を引く刀は普通の刀よりも大きく、見た目を全く気にしていない刀だった。

織斑先生が山田先生の持っていたB4版の紙を取り上げ読み始めた。数十行にも満たない文章を数秒で読み、やがて口を開らいた。

「どうやらお前のISは簡単に言えば搭乗者の考えている通りになるものらしい。更に束のお手製でどんなにいじってもその性質は変わらない機体だそうだ。だが、考えている通りになると言っても細部まで考えて展開しなければならなかったため今までまともに展開できた者はいなかった。稀に展開できても今までだと良くて第二世代の前半、悪いと第一世代のにも及ばないような代物になってしまい役には立たなかった。そのため全467機中には含まれていない番外の機体だそうだ。しかし展開は出来ているな。時間ももうあまり無いさっさと始めろ。」

促されるまま、理解できていないままアリーナへと続くゲートの前に移動して行った。

もう織斑　一夏は競技場の中心で雪片式型を構えて待っている。

T o b e c o

n t i n u e d

第三アリーナ・Aピットにて（後書き）

この度も最後までお付き合いいただきありがとうございます。

誤字・脱字、文法的なミス、指摘、感想などがありましたらよろしくお願ひします。

如何でしたでしょうか？

今回ののはかなりいろいろ意見が出てくると予想していますと言うのも一護のISについては読んでもらいました皆さんの中に「物が違うじゃないか」とか「予想道理」と思う方もいらしゃると思います。が、この設定には変更するつもりはありません。

また別の日に一護のISについては詳細を書いていこうと思います。そしてヒロインとの組み合わせについてですが、まだ7巻を手に入れることが出来てないため最新の情報が分からない且つ私が優柔不断であるためまだ決めかねています。

今のところ一夏に関しては取り合えずこのまま第。そして一護のヒロインにはやはり井上、ルキアが第一に上がってくるためか、元気がある、一護に絡ませやすい、一護が面倒見が良いと言う点で鈴、シャルロット、ラウラ辺りが適当か？そうなるかとセシリアは一夏側にするか？そして本を読んだ感じではなんとなくに楯無はなんか傍観者のような気がするので姉妹はどうなるのやら・・・とまあこんな感じです。

最後に次回からは戦闘シーンが入ります。どうなる事やら・・・上手くまとまればいいのですが・・・。

最後までありがとうございました。

ではまた

一護 vs . 一夏 vs . セシリア (前書き)

毎回読んでいただいている皆さんとはお久しぶりです。

いきなりこの話から読んでいる方はいないと思いますがお初お目にかかります。

同じことを書き続けていますがナイトキャップ様 reina様

つむり様 寒桜様 カジ様 感想どうもありがとうございます。

これからも頑張ります。

また指摘を頂きました、つむり様申し訳ありません。今回で2度目、直そうと努力はしているのですが、どうも上手くいっていません。

皆様には感覚を掴むまでもう暫く我慢していただけたらと思いますと同時に修正も加えて行きたいと思っています。

寒桜様の作品も読ませて頂こうと思っっているのですが手が回らず・

・申し訳ありません。

謝ってばかりで本当に申し訳ない。

今回も楽しんでいただけると幸いです。

それではどうぞ

一護 vs . 一夏 vs . セシリア

第三アリーナ

真つ白い『白式』を纏い雪片式型を構えた一夏と真つ黒い死覇装を纏い斬魄刀を背負った一護が対面した。

開始の合図を聞きながら2人は激突する。

「いくぞ！一護！！」

そう言つて突つ込んでくる一夏

振りかぶつて袈裟切り、そのまま息をつく暇なく逆袈裟切り、その後も絶え間なく雪片式型で切り掛かってくる。

一護はそれを何も語ることなく無言のまま紙一重のところまで避けていく。

一撃目は後ろに一步避け、二撃目もまた一步、次々と襲い来る刃を少しずつ後退しながら、体を反らしながら上手くかわし続けていった。

しかし、幾重にも繰り出されるその切っ先は確実に一護を捕らえ始めていた。

そして遂に、その切っ先は一護の右肩を捕らえた。

ほんの少しではあるが一護のシールドエネルギーを削り取る。

一夏は先程から気になっていた疑問を一護に投げかける。

「なぜ、刀を抜かない。」

「丁度、体が温まってきたところなんだ。」

ここにきて一護はやっと刀に手をかける。

この言葉に嘘は無い。

下手に構えて打ち合うよりも避ける事だけに集中して少しでもISに慣れるという意味合いの上においては言うまでもなく、その最中で相手の刀・しぐさ・癖等を冷静に分析していく事でどう対処するか考えているところであった。

先程の戦闘で一夏は、セシリアの駆るブルー・ティアーズ（中距離型）と戦ったが、近接戦闘つまり刀と刀をぶつけ合う事は無かった。剣道において一護は試合や大会に出場する事はなかった（理由は知らないが）、稽古の時はいつも形がなっていないと言われそれを直すために何処が無理矢理合わせたというような感じがあり、一度も本気で打ち合った事はなかった。だから一夏は、剣道どころか相手を倒すための一護の刀技を全く知らないといっても過言ではなかった。

だが反対に一護は先程のやり取りや剣道で一夏の体運びや刀を振る時の癖を冷静に見極めていた。

にも観客席にいる人にもひしひしと伝わってきた。

再び一夏が振った横一閃の刃が一護のシールドエネルギーを大きく削り取った。

逆に一護は繰り出す刃は、全て一夏の雪片式型で捌かれるか避けられるという結果になっていた。

傍から見れば明らかに一夏の方が優勢で一護は押され気味に映っていた。

もうじき試合が始まってから30分が経過する。

正直、一護も一夏も焦りを覚えていた。

一護は思うように体が動かないのに対して、一夏はもう少しのところで必殺の一撃を逃してしまふ事に対してだった。

一夏の白式は単一使用能力として一撃必殺の『零落白夜』を有しているが、これは諸刃の剣、能力を知った後ではできれば使いたくは無い。

そんな時焦りの所為か、縦に力一杯振り下ろした一夏の刀が、今度は一護の目の前を通り過ぎ地面を抉り取った。
辺り一面に舞い上がる土煙。

その土煙の中から声が聞こえた。

その声は一護にのみ聞く事ができるものであり、一護の半身とも呼べる斬月のものであった。

「久しぶりだな、一護」

斬魄刀の始解条件は斬魄刀（斬月）の本体との対話と同調それが今、揃った。

「やっとおっさんの声が聞こえたぜ。」

一護がそう呟き、手にしていた斬月を静かに鞘に納めた。

とその瞬間に一護を中心として輪が広がるように土煙が晴れていった。

一護の体はうつすらと青いオーラが覆っており、その目は力強くまた嬉々としていた。

「待たせたな一夏。こっからが本番だ。」

刀を鞘に納めてはいるがまだ柄を握っている。

「斬月！」
そう叫びながら斬月を一気に引き抜く、すると今までは巨大であろうともまだ刀の形を保っていた斬魄刀だったが、今、一護の手にしているのは鞘も柄も鏝も無く、唯柄の部分に晒が巻かれているだけのまるで巨大な出刃包丁のような形になっていた。

「何だあの武装は」
誰もがそう思い口にした。

（一護が叫びながら抜刀したものは既に刀ではなく出刃包丁（？）いや斬月と言ったか。本当に何なのだ、あのISは？）
千冬がそう思うということは、今まで世界大会の出場者の武装でも学園での専用気持ちの武装さえもそれこそ各国が秘密裏に躍起になって開発している第三世代型の武装の中にも一護の斬月と同じ形状を持つものは無かった。

今まで千冬さえも見た事もない武装、その示すところの意味は誰一人として考え付かない、考え付くこと無い武装であるという証でもある。

完全に一護のISだけの能力である。つまり現時点を持って『無名のIS』は『斬月』という名のISへと進化一次移行したのであった。

いきなりの変化に一夏は聞くに耐えかねたらしい。

「一護、何だそれ？」

「やっと一次移行が終わったみたいだ。本番はこれからぞ！」

一護は瞬歩で一夏の背後に回る。

「き、消えた？」

それに答えるようにハイパーセンサーがけたたましく警戒音が背に危険が迫っている事を告げる。

とっさに雪片式型を背後もっていく。

そうする事で一夏はその場をしのぎ、大きく後方へ飛び退いた。

一方、一護は斬月ともう一度戦える事にちょっと感動を覚えた。

一護の反撃が始まる。

自分のもてる力を全て使って一夏に勝ちたいと思った。

また瞬歩を使って一夏に突撃する。

鐳（？）競合いに持ち込み弾く。

一夏は後に距離をとろうとする。
がそれを一護は許さない、あっ、という間に近づきまた斬月を横に振るう。

此処に来て初めて一夏のシールドエネルギーを削った。

一夏が一護にただ切ったというよりもかするような一撃ではなく、ISがなければ相手を半分に分断するような一撃だった。

ダメージ、230。シールドエネルギー残量、370。実体ダメージ、中。

「まだ、くたばるなよ！一夏！！こんな気分久しぶりなんだ！！」

一護は一護で気分が高揚しているようだ。

その証拠に普段（前）は使わなかった戦闘法しかし彼だけの戦闘法
それは嘗て自身の精神世界において戦った内なる虚が
使用した戦闘法で斬月の晒の部分を持ち、斬月自体を投げ飛び道具
として扱う方法である。

一護が斬月を投げる。

予想を全くしてないかったのだろう、少しシールドエネルギーを削りながらも横に避けた。

ダメージ、45。シールドエネルギー残量、32
5。実体ダメージ、中。

しかし目は投げられた斬月に向いてしまった。

その一瞬が戦闘中においては命取りになる次の瞬間、強烈な蹴りが後頭部を襲う。

ダメージ、85。シールドエネルギー残量、240。実体ダメージ、中。

しかしのんびりもしてられない。空中で体勢を立て直した一護は手に持っていた晒を一気に引っ張った。

すると先程避けた斬月は晒に引っ張られてもう一夏の目の前。

「くっ！」

急いで体を捻るがまたかすったらしい。

ダメージ、55。シールドエネルギー残量185。実体ダメージ、中。

そしてそのまま持ち手の部分を掴み、自らの霊圧を斬月に喰わせ、斬月の刃先から固めた霊圧を飛ばす。一護の十八番^{おはこ}。

「月牙天衝！！」

放たれた一撃は間違いなく一夏を飲み込んだ。土煙が辺りに籠もり視界が悪くなった。

晴れるとそこには単一使用能力『零落白夜』を発動させ、それを地面に突き刺してなんとか立っている一夏の姿があった。

そう月牙が当たる直前に一夏は『零落白夜』を発動させ月牙を切り裂いた。

いくら威力が強大であっても斬月から放たれる『月牙天衝』は^{シールドエネルギー}霊圧

を消費したもののつまり『零落白夜』で切り伏せる事ができない訳が無かった。

一護の動揺を逃さず切りかかろうとする一夏……

がしかし無常にも試合終了のブザーがアリーナに鳴り響く。

理由は簡単、セシリアの時と同じく一夏のエネルギー切れとなんともしまらない結果に終わってしまった。

アリーナの外部スピーカから声がする。

「おい黒崎、外部の損傷はないか？ないなら早くピットに戻ってエネルギーを補給しろ。」

（霊圧つてシールドエネルギーと同じように補給できるもんなのか？だめだ分かん……）

「あゝ、すみません。補給はいらないです。」

「いらないとはどういうことだ！後15分しか時間がないんだぞ！まあ本人がいいと言うならそのままやれ。行って来いオルコット！」

織斑先生との数十秒にも満たないの会話の後、1分と待たずにセシリアがアリーナの中心部に躍り出た。

「一夏さんとの試合では油断して懷を許してしまいました。今回はそうはいかなくなつてよ。最初から本気でいきますわ。行きなさいブルー・ティアーズ。」

そう言つと時間が推している所為もあるのか、一気に勝負をつけようとビットを展開し攻撃を開始する。

それを一護は前後左右あるいは空中に避け続ける。

しかしビットによる攻撃は徐々に包圍網を狭めてゆき、後方の二つからビームを食らつてしまふ。

「っ、ちくしょう。白哉の千本桜みたいな戦い方しやがって。」

と、けちをつけるがまたそれも戦いの内。

食らつてから追撃を受けないように瞬歩で距離をとる。

がその先では既にセシリアが一護をロックしていた。

2メートルを越す67口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』から耳障りな音と共にレーザーが放たれた。

回避は不可。

そう判断した一護は、斬月を盾代わりに難を逃れた。

斬月に当たつたレーザーは四方八方に散らばりながらやがて霧散して消える。

レーザーを切る(?) 光景に呆氣に取られていたセシリアが気づい

た時には、警告を促す警告音がけたたましく鳴り響き、その警告の示す先には青白く光る斬月を大きく振りかざした一護がいた。

「これで終わりだ！この一撃に全てを掛けるぜ！月牙天よ・・・」
がしかしそんな境地にあつてなおセシリアは危機感を全く抱かなかつた。

それどころがデジャヴを感じる始末・・・

それもその筈、斬月の能力『月牙天衝』は自身の霊圧を消費し、超高密度の霊圧を飛ばす技、これとISのルールとを含めて考えてみよう。

シールドエネルギーが無くなった方が負け。

これこそが一夏が2敗した理由

いくら一護が飛び抜けた霊圧の保持者であつたとしても初期段階にしては、とか最初にしてはという言葉が付く。

つまり全く鍛錬をしていないのだから、すぐいつも（前）のようにバンバン霊圧を使えば枯渇するのも当然。

ここでもう一度おさらいしよう。斬月の能力『月牙天衝』を使用すれば、霊圧に当たるシールドエネルギーを大幅に使用すると同義、しかし今の一護は鍛錬不足で何発も打てるほど霊圧を持っていない。そしてISの勝負はシールドエネルギーが無くなった方が負け。

これらから導き出される答えは

一護の負け

しかし渾身の力で放たれた白い三日月型の斬撃はセシリアのシールドエネルギーを大きく削り、瀕死状態。

また一護は霊圧を全て使い切ったため、『斬月』が強制的に待機モードになってしまい、人が落ちれば確実に死が決定するだろう洒落にならない高さから絶賛自由落下中だった。

「あーれーれーれー、まーえーにーれーもーあつたーぞー
ーこんなー場面ー」

ふと体が何かに支えられた。

気づけば『ブルー・ティアーズ』のビットが一護の下にあって一護を落下の危機から救ってくれていた。

「た、助かった・・・」

と言い残して気を失ってしまった。

余談として記すならこの時の一護のセシリアに対する感謝の念は生涯の中で1、2を争うほどだった。

n u e d

T o b e c o n t i

一護 vs . 一夏 vs . セシリア（後書き）

この度も最後までお付き合いいただきありがとうございます。

誤字・脱字、文法的なミス、指摘、感想などがありましたらよろしく願います。

如何でしたでしょうか？

初となる投稿作品でこれまた初となる戦闘シーンだった訳ですが・
・物足りない方もいらっしゃるかもしれませんがこれが限界です。

これからも更新スピードは不明ですが次回から少し（かなり）字数が減るかも・・・

次かその次位で斬月の詳細説明できるかな？
楽しみにしていただけるとうれしいです。

それではまた

試合が終わって（前書き）

お久しぶりです。

前回の更新から一月以上が開いてしまいました。
待ってくださった方々、申し訳ありませんでした

また恒例の言葉となりましたが、この様な所でのお礼でごめんなさい。

前日も更新してから一日も経たずにreina様 つむり様 未来
跳躍様 寒桜様 カジ様から多くの感想・アイディアを頂きました。
とても励みになり、参考になりました。
ありがとうございます。

それではお楽しみいただけたらと思います。

試合が終わって

一護対セシリアの試合が始まる頃

ビットに戻った一夏は周りから様々な言葉を掛けられていた。

山田先生からは

「お疲れ様でした。」

と労いの言葉。

箒からは一言

「馬鹿だな！負け犬！」

織斑先生からは

「馬鹿もん！あれだけ持ち上げておいて！！しかも同じ手で負ける奴がいたとはな！大馬鹿者が！」

今更、馬鹿が大馬鹿に変わった位でどうって事はない、でも流石に声に出して言われるとこたえる。

そんな会話の中アリーナの方では一護とセシリアが円舞曲フルツを繰り広げている。

一夏は戦ってみて分かった事がある。

セシリアは強いが戦った感じでは一護の方が強い、それも素人が戦ってすぐに歴戦の猛者だと分かるほど強い。

そしてその振るう刃には自信や覚悟が見えたように思えた。

そんな事をぼんやりと思っているうちに一護がセシリアの放った極大のビームを弾いて一気に後ろに回りこみ巨大な出刃包丁^{斬月}?を大きく振りかぶっていた。

斬撃を放った直後、一護の纏っていた袴(?)と出刃包丁(?)がいきなり消えて重力に従って落下を始めた。

正直言つて一夏はそんな現状がさっぱり理解できなかった。

「此処にも馬鹿がいたか。」

と織斑先生は額を押さえながら呟いている。

しかしこのままだと危険と判断したのだろうか、セシリアに一護を助けるように指示を出した。

結果、一護の負け。

しかも伊達に親友を長い事しているだけあって敗因は同じ・・・

気絶した一護は一夏に保健室へと運ばれた。

試合が終わり2時間が経過した。

「やっと気がついたか、馬鹿者。どうやら外傷はないようだ。先程まで一夏や篠ノ之たちも居たんだがな、下校時刻が過ぎたため先に帰した。」

ベッドから起き上がってみれば織斑先生の声が聞こえるというのはなかなか非現実的な光景だなあとぼーとした頭で考えていると

「お前が斬撃を飛ばした後どうなったかは分かるか？どうやらあの斬撃のせいでエネルギー切れになりでISが強制的に解除された。結果、お前は貴重で擬似的な空の旅をする事になったというわけだ。最後にお前のISについてだが分からないことが多すぎる。今回の試合で分かった事をレポートにまとめて明日の朝一で提出しにこいいいな。分かったらさっさと寮にもどれよ。」
と矢継ぎ早に言い残して何処かへ行ってしまった。

しかしこの時、千冬の頭の中ではあの『名前がないIS』は束が絡んでいるのではとか、一護の後半の動きについてどう見ても一介の高校生の動きには見えなかった事とか考えれば考えるだけ絡まりあつていく内容だった。

(取り敢えずあのISに関しての詳細なデータはともかく束が絡んでいるかどうかだけでも確認するか。)
電話を取り出しある番号を入力する。

コール音が暫く続くと思いきや、1コールで目的の人物につながった。

「束か？わた「やつほー！ちーちゃん！！」・・・」

途中で言葉を遮られたのも腹が立つが何よりあの呼び方も気に食わない。

まだ電話の向こうでは何やら一人で盛り上がっているようだが無視して話し始める。

「今日は聞きたい事があつて電話したんだが・・・ちょっといいか。IS学園に今日届けられた2機のISのことだ。一機は『白式』もう一機は『名前がないIS』・・・単刀直入に聞こう。この2機はお前が作ったものか？『白式』についても聞いたほしいところだがあの『名前がないIS』は一体なんなんだ？お前は一体何がしたい？」

一気に捲し立てると

「質問が多いなあー！でも他でもない私のちーちゃんからのお願いし、束さんは今とっても機嫌がいいから全部答えちゃうよ！まず最初の質問2機のISは・・・何と私が一から作りあげちゃった一品です！どうかかな？いっくん、いっちーに気に入ってもらえたかな？さあ次にいってみよう『白式』はちーちゃんの考えている通りだし、『名前がないIS』の方は本当に何にもない設定してないISだよ。」

さも簡単に事実を語りだす束を余所に思考に入る。

「何も設定されていないだと・・・」

「何も設定されてないってのは、ちょっと語弊があるかな？正確に言えば1個だけしか決まりごとがないんだよ！あれは搭乗者の深層意識下にあるもの、言いかえればもともと持っている素質を具現化させるという能力をもったISなんだよ。だから今まで自分の見えてきたISをだったり、机上の空論の元の装備、装甲をだったり、そういうありきたりの事のじゃあ駄目なんだよ！」

「では、あのISは黒崎の深層意識下、奴の素質の具現化だという

のか・・・」

「よし最後の質問に関しては世界征服？・・・それとおまけで教えてあげるけどね！実は同じ『名前のないIS』は3機あるんだよ！いつちーISどんなのになったのかとつても興味があるんだけど今面白いもの見つけちゃって手が離せないんだー。その内遊びに行くから篝ちゃんにもいつくんにもいつちーにもよろしく言うておいてじゃあねー。」

そこまで一方的に喋ると電話を切ってしまった。

「おい、束！」

慌てて呼び止めようとするが、既に切れてしまい電話特有のツーツーという音だけが残った。

束による世界の危機が発覚した？その時、一護は、寮のエントランスホールまで戻ってきてある事に気が付いた。

「ヤベ！斬月どこ行ったんだ！」

そっこう慌てているうちに先週やった授業内容を思い出した。

確か授業ではこう習ったはずだ。

ISは待機モードのときはアクセサリのような物になっていると、そう思い出した一護は一つの道具に思い当たった。

代行証・・・嘗て一護が死神になるときに使用

していた魂魄と体を分離させるためのもの

しかしそれは趣味の悪い髑髏が付いたものであった。

思い当たった形が分かれば探すのは容易いものだ。

制服のベルトを確認するとそこにはそれがあつた。

「しかし、全つ然わかんねえなあ。どうなつてんだこれ？」

手のひらに乗せるようにして感触を確かめるが、実際ISSを許可なく展開する事を禁じられているためむやみやたらと展開すると後が怖いのでやめて置く。

取り敢えず運んでもらったり、心配を掛けたりした一夏たちにお礼と報告に行こうと彼らの部屋へと足を進めた。

部屋に行くと一夏が迎えてくれた。

そこにはとても上機嫌な筈がいたため思わず同一人物か疑ってしまった。

どうやら一夏と二人で放課後訓練をする約束をしたらしい。

一夏がその件で誘ってきたが二人の間に入るのは野暮だろうと思いついて遠慮しようとしたが、筈も構わないと言ってくれたのでそのお誘いに甘える事にした。

その後、暫く昔話に花を咲かせたが、途中で一護が明日の朝一で織村先生に提出するレポートの存在を思い出して半ば徹夜状態になったのは言うまでもない。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.

試合が終わって（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございます。

誤字・脱字、文法的なミス、指摘、感想などがありましたらよろしく願います。

感想の中でこれから説明していこうと思っていた事（意識云々など）を皆さんがどんどん自分の考えていた事を汲んで下さるので説明が要らなくなってしまう・・・一応書くつもりだけど・・・

寒桜様 誠に申し訳ないのですが指摘に関しては簡単な機体説明を入れようと思っっているのもう少しお待ちいただければと思います。

今回は一夏視点、千冬視点メインになりほぼ一護が脇役のような形に・・・

また束との会話の中に『名前がないIS』は3機と書きましたが、単に全ISの総数が467機と半端なのが嫌で書いただけですので気にする必要はない？（赤椿を考えると468機、3機足したら・・・471機・・・また半端になってしまった！）

最後に皆さんがこの作品について気になっている事の一つに更新の速さの問題があると思います。

これに関しては残念ながら受験が終わるまで改善できる見込みがありません。

そして今回のように各週のように模擬テストや中間テスト、受験勉強に追われる日々の合間合間に書いているこの作品はどうしても遅

くningerがちです。

次の更新も何時になるか書いている本人にも全く分かりません。(

一週間後になるか一月後になるか・・・)

そこで少し古い且つ少ないのですが、私のマイページにあるお気に入り作品を読んでみてください。(一部はほぼ停止状態のものもありますが)とても面白い作品ばかりです。

長々と失礼しました。

ではまた

IS (前書き)

お久しぶりです。

前回の更新からまたもや一ヶ月以上間が空いてしまいました。

reina様感想ありがとうございました。これからも頑張ります。

それではお楽しみください。

IS

翌朝

昨日指示されたレポートを急いで作成し、床に着いたのが2時30分。

そして現在時刻はもう既に6時30分を回っていた。

着替え、食堂で手早く朝食をとり、職員室へと向かう。

正直なところあまり気が進まないのだが、提出を断つたり、遅れたりしようものなら間違いなくあの出席簿出席簿が襲ってくる。

その結果もちろん為す術もなく意識を刈り取られることになる。

あの一撃は何人たりとも避けることは敵わない代物なのだ。

だが結局は書く事が見当たらず、分かった事としてまとめた内容を簡単にすればはこうだ。

現状では

- ・このISは斬月と言う名前を持った事
- ・斬月には人格があるという事
- ・特徴としては死覇装を着て、武器は斬月という出刃包丁状の物が一本のみである事
- ・霊圧と呼ばれるものがあり、どういう原理化分らないがシールドエネルギーの代わりを果たすという事
- ・斬月は霊圧を消費し斬撃を飛ばす能力『月牙天衝』を持つと言う事
- ・PICが搭載されていないため、霊圧が変わりの役割を果たしている事
- ・瞬歩と呼ばれる高速移動の事

馬鹿正直に死神のことを話すことはできないし、話す気もないためこの程度が限界だった。

職員室に続く長い廊下を歩いていれば直ぐに目的地に着いてしまった。

「失礼します。」

そう言つて入るがやはりどこの学校でも職員室は静かなものだといふ事がよくわかった。

あまり大きな声で入室したわけでもないのにシーンとした職員室では十分に響き渡つた。

おっかなびつくり織斑先生の机まで行つて挨拶をする。

挨拶を返され、言われていたレポートを渡す。
ぱらぱらっと軽く流し読んで机の上に置いた。

「お前のISの事だがまだはつきりした事は分かっていない。これからお前の作ったこれとデータとを取りながらそのISについて解析をしていこうと思う。放課後ISの整備室に一夏も連れて来い。そこでお前たちのデータを取る。いいな。」

「ああ忘れるところだった。」

『ISを解析』というところに若干の不安を覚えながらもあまり居心地の良くない職員室から一刻も早くも教室に撤退しようとした一護を引き止めた。

「昨日の試合の件だが・・・」

朝のHR中おかしなことが起きた。

「それじゃあこの前言っていたクラス代表と副代表の件ですが、代表は織斑君で副代表は黒崎君に決まりました！凄いですね一年一組

織斑 一夏君に黒崎 一護君」の字のオンパレードですね！」

そんな発表に二人の人物が席を立った。

「「なんで俺が（副）代表なんだ！」」

片方曰く、負けたのに、もう片方曰く、やりたくなくて辞退したのに・・・

しかし現実には甘くはなかった。

「それは私が辞退したからですわ。」

「「なんだとそんな馬鹿な」」

「うるさいぞ！馬鹿共が！！」

織斑先生の一喝がクラスの雰囲気を変えた瞬間であった。

「織斑が代表になったのはオルコットと黒崎が辞退したからだ。次に黒崎が副代表になったのはお前が代表を辞退するときになんと言つて辞退したか思い出すんだな。」

言いながらとてもいい笑顔を浮かべている。

えーと確か

『勝者の特権』・・・敗者が持ち得ないものにして、勝者のみが行
使できる絶対の権利

「お前は『勝者の特権』だといってオルコットと織斑に任せようとした。そうだな。」
「そう何も間違つてはいない。」

「その事をオルコットに話した。」

その一言で理解せざるを得なかった。
要するにセシリアが『勝者の特権』を行使したという事らしい……

「私も『勝者の特権』と言うものを行使させて頂きましたの。」
と言いながら腰に手をやっている。

そんな光景を見て一夏は何か様になつてゐるなあと思つたのも余談である。

放課後

一護は朝言われた通りに、一夏を連れてISの整備室へ向かった。

2時間後

取れるだけのデータを取った。

例えばシールドエネルギーの総量・最高速度・武器の特性 e t c
…

『白式』の場合は他のIS同様詳細なデータが時間の経過につれてどんどん記録されていくが、逆に『斬月』の場合はつなげる機器との接続部またはそれに順ずるものが全くなかった。

なので、データ採取は一護からその状況に対するコメントと速度などの外部から測定するという形でしかデータは取れなかった。

IS紹介

IS『名前のないIS』 『斬月』

世代：第4世代

待機状態：絵馬型の板の上に×印さらにその上に髑髏が画かれているアクセサリー？

装甲（？）：死覇装、黒を基調とした袴のような服。

武器：斬月（始解状態・1時移行時）のみ、出刃包丁型で鞘、柄、鍔がなく柄の部分に（多少の伸縮が効く）晒が巻いてあり、自身の^{霊圧}シールドエネルギーを喰らって斬撃を飛ばす能力を有しその威力はシールドバリアーを正面から破り、絶対防御を発生させるほど。

補足説明

東博士お手製のISで搭乗者の深層意識を具現化する能力を持つ機体。

また467機の中には含まれていない機体で同能力を有する機体が3機存在しこれらを含めるとISは全470機。

従来のISとは異なっており、ISの必要不可欠なシールドエネルギーは死神時代の霊圧が元となっているためシールドエネルギーの補給による回復は不可能なため現状では自然回復に任せるしかない。

それ故にあまり連戦・長期戦は出来ない。

これは一護にとって大きな利点である。

なぜなら、生まれついてから他と隔絶した高い霊圧を保持し、その後も成長する度にあがっていき、遂には他の隊長格や藍染を軽く凌駕するにまで至っていたからである。

従って、シールドエネルギーは霊圧同様に訓練次第で上がる事が見込めている。

しかし欠点もある。

ISの基本機能とも呼べるPICがないこれは死神時代に霊圧で霊子を固定していたように、シールドエネルギーをシールドバリアーに変換して使用することで足場を作りその上に立つそのため足場の作成の度にシールドエネルギーを消耗する結果になってしまう。

最後に高速移動歩法として瞬歩と呼ばれる移動法が使える。(白式

イグニッション・ブースト
『瞬時加速』と同じくらい)

瞬歩は直線上以外への移動も出来るためそれを利用し、一旦相手の視界から消えたように見えるが、高機動性の機体の瞬間加速や高感度のハイパーセンサーが搭載されている機体には通用しない。

最後に現状では卍解・虚化は不可能しかし可能性は十分ある。

今回の測定の結果で『斬月』は高性能、第4世代であると同時に一夏の『白式』のように欠陥機?である事が判明した。

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.
.

T
o
b
e

IS（後書き）

最後までお付き合いありがとうございました。

誤字・脱字、文法的なミス、指摘、感想などがありましたらよろしくお願ひします。

さて、今回の更新により一護のIS『斬月』の現時点における説明を投稿させて頂きました。

もうかなり前のことになってしまった（してしまった）寒桜様より頂きました感

想に霊圧とシールドエネルギーの間にある関係性についての考察、矛盾点の案についてですが、一護自身に霊圧が復活したと言うのではなく、ISによって彼の深層意識が写し取られたもの^{具体化}であるためISを展開している時のみの物としています。

また霊圧＝シールドエネルギーとした理由としましては、死神にとって霊圧が全てといっても過言ではなく、それはISにとってシールドエネルギーが同様であると判断したため、一護の能力を少しでも再現したかったためなどいろいろありますが、詰まるところ都合主義だと思ったださっても構いません。

そしてreina様より頂きました感想の中に代行証はアクセサリではなく、キーホルダーの方が近いのではと言う指摘を受けました。

こちらは、原作の一夏の『白式』がガントレットであるため代行証も良いかと思ひ書いてしまいました。何の説明もなく書いてしまったこちらのミスです。ですが、他に代案もないため、原作同様、特例として代行証もセーフと言う事で対処したいと思ひます。

随時、返答しない上に長らくお待たせしさらには下手な文を長々と本当に申し訳ありませんでした。

最後になりましたが、つい最近、校外試験が返却され、あろうことが評価を少し落としてしまいました。

そのため皆様には大変申し訳ないのですが、残りの7月・8月は勉強に専念したいため、更新を一旦完全に中断させていただきます。しかし、必ず戻ってまいりますので、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

ではまた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2333s/>

黒衣のIS

2011年10月8日19時43分発行